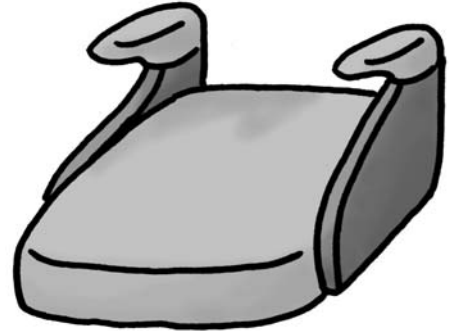
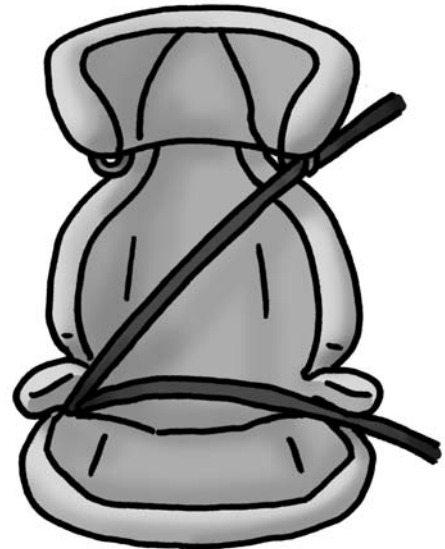
（3） 学童用シート

シートベルトを使えるようにする補助シート。法律ではチャイルドシートの使用義務は6歳未満ですが、シートベルトが正しく使用できるようになるまでは、必ず学童用シートを使用する。

対象:体重15kg以上36kg以下、身長140cm以下。4歳から10歳くらいまで。
特徴:シートそのものには体を固定する機能はなく、子どもが自動車のシートベルトを正しい位置で使用できるようにする補助装置。

●座面だけのもの

子どもの座高を上げることで、シートベルトの肩ベルトが首にかからないようにしたり、座面にあるフックで腰ベルトが腹部を圧迫したりすることを防ぐ。

●背もたれ付きタイプ

座面だけのものと同様の機能を持ちながら、肩ベルトの位置がより適切に調節できるもの。サイドサポートが側面衝突の衝撃から子どもの頭部を守るため、より安全性は高い。

（4） 兼用タイプ

チャイルドシートの種類は「乳児用」「幼児用」「学童用」の３種類が基本ですが、その他にも兼用タイプとして、「乳児・幼児兼用タイプ」と「幼児・学童兼用タイプ」などがあります。

① 乳児・幼児兼用タイプ

リクライニング機構と、取り外し可能な乳児用プロテクターによって新生児から４歳くらいまで使用できる。そのため乳児期には後ろ向きや横向きで、幼児期には前向きで使用する。

② 幼児・学童兼用タイプ

１歳から10歳くらいまでの長期間にわたって使用できるタイプ。

背もたれ、クッション（座面）、インパクト・シールドなどの３つの部分で構成され、２～３歳をすぎるとインパクト・シールドを取り外して、学童用シートとして使用する。

2　チャイルドシートの取り付け方

チャイルドシートはシートベルトを通して自動車の座席に固定します。このときシートベルトをどのように通すかの固定方法に違いがあります。

また、製品によって取り付け方に違いがあるため、取扱説明書に従って取り付けることが基本です。

方式	シートの種類	取り付け方
2点固定式	乳児用シート 幼児用シート	・2点式シートベルトなどのように肩ベルトがないタイプの自動車でも使用可能。 ・自動車のシートベルトが3点式の場合には、シートベルトの肩ベルトと腰ベルトを束ねて1本にして通し、2点で固定する。
3点固定式	乳児用シート 幼児用シート	・3点式シートベルト専用タイプとして肩ベルトと腰ベルトを装置背面に通し、3点で固定する。 ・肩ベルトがないタイプの自動車では使用不可。
ベルト固定式	幼児用（インパクト・シールドタイプ） 学童用シート	・自動車のシートベルトで装置と子どもとを一体化して拘束する。
車両限定型	ISO FIX	チャイルドシートを自動車の後部座席に取り付けられた専用金具に押し込んで取り付けるもの。そのためチャイルドシートと自動車の双方に対応した装備が必要となる。現在の法律では、車両限定型となる。 衝突時の移動量を軽減するため上端をトップテザーで固定する。
車両限定型	チャイルドシート 内蔵シート	自動車の後部座席に、あらかじめチャイルドシートが組み込まれているもの。ユーザーが取り付ける必要はない。（多くは学童用シートで、現在はほとんど存在しない。）

3　シートベルトの違いを理解する

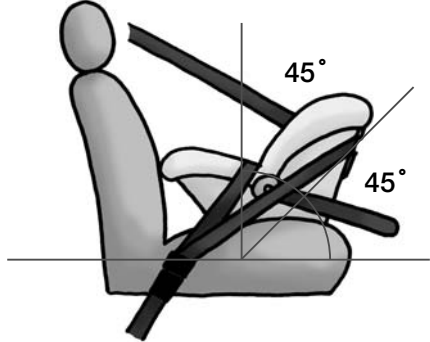
チャイルドシートはシートベルトでしっかりと固定しなければ、衝突時に正しく機能しません。正しくしっかりと取り付けるためには、シートベルトの機能を理解し、チャイルドシートの取り付け方の違いを知る必要があります。

シートベルトには、衝突時の安全性を守るためのロック機能があります。ロック方法には『ELR(Emergency Lock Retractor)』、『ALR付ELRチャイルドシート固定機能付き（Automatic

Lock Retractor)』、『NLR(Non Locking Retractor)ロック機能なし』の3種類です。前席ではELR機能だけのシートベルトが一般的ですが、後席の場合にはチャイルドシートを固定しやすくするためのALR機能のある自動車がほとんどです。

このALR機能が付いているシートベルトに限って、「幼児用シート」を有効に取り付けることができます。

種類	機能	チャイルドシートの取り付け方法
ELRシートベルト(緊急時ロック式装置付き)	シートベルトをゆっくり引くと自由に引き出せるが、急ブレーキ時など強い力が加わるとロックする。	●2点固定式チャイルドシート(パターンA) 3点式シートベルトの場合：肩ベルトと腰ベルトを1本に束ねて通し穴に通し、ぐらつきを防ぐため固定金具※を使って固定し、ベルトが緩まないようにする。 ●3点固定式チャイルドシート(パターンC) 固定金具を使いシートベルトに緩みが出ないように固定する。
ALR付ELR (チャイルドシート固定機能付き)	通常はELR機能だが、シートベルトをすべて引き出すことによって、ALR機能に切り替わり、シートベルトを巻き戻すとその位置でロックされ、チャイルドシートが固定できるもの。(チャイルドシート固定機能付であることを示すための表示がベルトに付いている。)	●2点固定式チャイルドシート(パターンA) 肩ベルトと腰ベルトを1本に束ねて通し穴に通し、ちょうどよい長さで固定金具を使って固定する。ALR機能は使用しない。 ●3点固定式チャイルドシート(パターンB) チャイルドシートを正しく取り付けてから、余りのシートベルトをすべて引き出すことでALR機能に切り替わり、固定金具を使わなくても、前向きに取り付けて使用する幼児用シートが固定できる。

※ シートベルトが伸び縮みしてチャイルドシートがぐらつかないように固定するための付属部品。「固定金具または固定クリップ」「ロッキング・クリップ」ともいう。メーカーによって形や取り扱い方に違いがあり、表裏間違えるとしっかり取り付けることができないため取扱説明書をよく読んで使用する。
現在では、固定クリップ内蔵型が主流となっている。

チャイルドシートとシートベルトの関係パターン

		シートベルト	
		チャイルドシート固定機能付き	チャイルドシート固定機能なし
チャイルドシート	2点固定式	パターンA	パターンA
	3点固定式	パターンB	パターンC

第5章　チャイルドシート取り付けのチェックポイント

1　主なミスユース（誤使用）とチェックポイント

（1）乳児用シート

主なミスユース	チェックポイント
1）リクライニング角度の調整不適切	特に乳児・幼児兼用シートには、数段階にリクライニングできるものが多くある。理想の角度は水平面に対して約45度。 45° 45°
2）シートベルトでの締め付け不足	シートベルトで固定する際、しっかりと締め付けた状態で固定しないと、ぐらつきが生じる。
3）エアバッグ付き助手席で後ろ向き使用	衝突でエアバッグが展開した際、乳児用シートの背もたれを跳ね上げて赤ちゃん（乳児）ごと座席に激突するので大変危険。
4）ハーネスの位置	ハーネスは放出防止の役割をしているので、できる限り子どもの体に密着させることが重要。ハーネスに緩みがないかチェックする。 ハーネスの引き出し口は子どもの肩と同じ高さか、少し低めの位置から引き出す。
5）固定金具・固定クリップの不備	固定金具の位置や取り付け方法などが間違っていると、チャイルドシートのぐらつきの原因になる。
6）シートに置いただけ	置いただけではチャイルドシートとしての機能は果たさない。シートベルトを使ってしっかりと取り付ける。

（2） 幼児用シート

主なミスユース	チェックポイント
1）シートベルトでの締め付け不足	しっかりと固定したつもりでも、思いのほかぐらつきが生じるもの。緩みがあると衝突時に体が前方に飛び出し、頭部や足を打ちつける危険がある。
2）固定金具・固定クリップの不備	ALR機能のないシートベルトの場合、必ず固定金具（固定クリップなど）を使用しなくてはならない。固定金具が正しく使われていないミスユースが見られるので、取扱説明書をよく確認する。
3）ハーネスの位置	ハーネスは子どもの体を固定するためのベルトで、緩みがあったり、肩よりも高い位置の穴を通したりすると、肩からベルトがはずれ衝突時に子どもを拘束できない。 ハーネスの高さは、成長に合わせて通し穴の位置を変える必要がある。
4）シートベルトの通し方が不適正	シートベルトはチャイルドシートにあるベルトガイド（通し穴）に正しく通す。その際通し穴を間違えたり、ベルトが中でよじれたりするとしっかり固定できないので注意する。
5）シートに置いただけ	置いただけのチャイルドシートは急ハンドルで倒れて子どもにけがを負わせたり、衝突や急ブレーキで体ごと飛び出す危険がある。子どもが乗っていないときに置いただけの状態にしておくと、倒れて前席に被害を与える恐れもある。

幼児用シートのぐらつき判定基準（「チャイルドシート使用状況調査」より）

チャイルドシート上端部を片手でもって力一杯（約10kgf）で前方向の力を加え、その移動量が3cm以内であれば「しっかり取り付け」、3cmを超え10cm以内であれば「少し緩みあり」、10cmを超えていれば「かなり緩みあり」と判断します。

（3） 学童用（ベルト固定式）シート

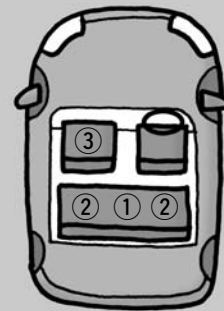
主なミスユース	チェックポイント
1）肩ベルトの位置	肩ベルトを通すベルトガイドやフックなどが付いた製品を使用する場合も、調整機能がない場合もできる限り鎖骨の中央を肩ベルトが通るように調節する。肩ベルトが子どもの頸部にかかったり、腰ベルトが腰部にかかったりしていると危険です。
2）腰ベルトの通し方が不適切	クッション部分の両脇の角状フックに腰ベルトを通し、骨盤の位置を調整する。フックに通していないと、正しい位置に骨盤を拘束することができない。

シートベルトは大人の体格（身長約140cm以上）に合わせて設計されているので、6歳以上になっても子どもの身長が140cmに満たない場合は、チャイルドシートを使用する必要があります。使用年齢の目安よりも体重や身長に合わせてチャイルドシートの利用は考えます。

2　チャイルドシートの正しい取り付け位置

チャイルドシートはしっかり取り付けたつもりでも、衝突の際には子どもを乗せたシートごと前方に移動します。そのため、少しでも空間の広い場所に取り付けることが理想です。

理想とする取り付け位置

① 後部座席中央 注（1）
② 左右後部座席 注（2）
③ 助手席 注（3）

〈注意事項〉

(1)　後部座席に取り付ける場合は、中央の座席があらゆる方向からの衝突に対して最も安全ですが、座席の形状やシートベルトの形態から、チャイルドシートがうまく取り付けられないことが多いです。

(2)　統計的に、前席同乗者より後席同乗者の死亡・重傷率の方が低いため、前向きに取り付けて使用する幼児用シート、学童用シートの場合でも、できるだけ後部座席に取り付けてください。後部座席の左右のどちらかに取り付ける場合は、子どもの乗せ降ろしを考えると、左側(歩道側)に取り付けるほうが安全です。

(3)　エアバッグが装備された助手席に取り付けてはいけません。特に、後ろ向きで使用する乳児用シートは、エアバッグが展開した勢いでチャイルドシートが跳ね飛ばされ乳児が死亡する場合もあり大変危険です。やむを得ず助手席に取り付ける場合は、エアバッグから遠ざけるため、助手席のシートを一番後ろに下げた状態で取り付けます。

3　チャイルドシートの分類

チャイルドシートは、次の3つのタイプに分類されます。現在市販されている製品のほとんどは、ユニバーサル(汎用)型ですが、次世代型チャイルドシートとしてより取り付けが簡単なISO FIX(国際標準化機構)があります。

分類	内容
ユニバーサル(汎用)型 チャイルドシート	シートベルトによってチャイルドシートを自動車の座席上に取り付けて使用するもの。 ●2点固定式・3点固定式・ベルト固定式
スペシフィックビークル(車両限定)型 チャイルドシート	ユニバーサル(汎用)型チャイルドシート以外のもので、特定の車両に取り付けることを目的として設計されたチャイルドシート及びシート組込式チャイルドシート(自動車の座席に組み込まれたタイプ)。 ●ISO FIXやシート組み込み型(ビルト・イン)
コンパティブル(兼用)型 チャイルドシート	ユニバーサル型チャイルドシート及びスペシフィックビークル型チャイルドシートとして両機能を有するもの。 近い将来主流になると思われるチャイルドシートとして、 ●ユニバーサル型ISO FIX(座席ベルトでもISO FIXでも固定可能)が注目を集めている。

※　ただし、ISO FIX、シート組み込み方式は車両本体に装置がないと対応できません。

第6章　チャイルドシートの選び方

1　チャイルドシートを選ぶときのポイント

（1）子どもの体格に合っている製品を選ぶ

チャイルドシートは体重、身長を目安に「乳児用」、「幼児用」、「学童用」と3つの種類に分かれているため、子どもの成長に合わせてチャイルドシートを使い分ける必要があります。

（2）安全性の高い製品を選ぶ

より安全性の高い製品を選ぶために次の項目に注意しましょう。

①　国土交通省の「装置型式指定」を受けた製品であること

道路交通法で使用が認められているものとして、国が定めた技術基準に合格した製品には「装置型式指定」マークが表示されている。指定を受けた製品であるかを確認して選ぶことが必要である。

②　チャイルドシートアセスメントで製品の評価を確認する

国土交通省と自動車事故対策センターは、自動車アセスメントの一環として、平成13年度から市販のチャイルドシートの安全性能（衝突安全性と使用性）について試験し、その結果を公表している。

チャイルドシートアセスメントの目的は、信頼できる安全性能評価を公表して、より安全な製品を選択しやすい環境を整えるとともに、製作者によるより安全な製品の開発を促すことによって、安全なチャイルドシートの普及を促進しようとするものである。

③　自動車のシートに置いたときの安定感を確認する

底面積が小さいものや底面が丸くなっているものは、ぐらぐらしやすいため、底面積の大きい製品を選ぶ。

④　背もたれが高い製品を選ぶ

背もたれよりも子どもの頭部が出てしまうと事故の際に保護できないため、背もたれの高い製品の方がより安全性が高い。

⑤　サイドサポートの大きい製品を選ぶ

横からの衝撃を受けたときにしっかり頭部を保護することができるように、サイドサポートの大きい製品は安全性が高い。

⑥　座面の低い製品を選ぶ

座面の位置が高すぎると全体の重心が高くなり安定性が悪くなる。兼用タイプなどの場合、自動車の天井との間隔も近くなるため使用性が悪い。

（3） 自動車とチャイルドシートの相性を確認する

自動車とチャイルドシートには相性があり、場合によっては取り付けることができない製品もありますので、次の項目に注意しましょう。

① シートベルトの長さを確認する

乳児専用のヨーロピアンタイプなどの場合、シートベルトが約230cm以上ないと取り付けられないこともあるので注意する。

② 適合表で確認する

チャイルドシートをしっかり取り付けられない原因の１つとして自動車の座席との相性がある。メーカーごとに相性を一覧にした「適合表」があるので、取り付ける自動車とチャイルドシートとの適合性を確認し、しっかり取り付けられる製品を選ぶことが重要。

③ 車内の空間とのバランスを確認する

子どもをチャイルドシートに座らせてみて、前席シートバックとの距離が近すぎて足がつかえたり、天井に近すぎたりするものはなるべく避ける。

（4） 取り扱いやすい製品を選ぶ

① あまり重くない製品を選ぶ

チャイルドシートは狭い車内で取り付けるので、あまり重くなく、取り扱いやすい製品を選ぶ。

② クッションやカバーが簡単に取り外せる製品を選ぶ

衛生上、簡単に脱着でき、こまめに洗濯できるような製品を選ぶ。

2　リサイクル・中古品を使用する際の注意事項

リサイクルや中古品を使用する際は次の項目に注意をする必要があります。

① 認証品の確認
- 国土交通省認証のラベルが付いていること。

② 履歴の確認
- 事故や落下などにより大きな衝撃が加わったことがないこと。

③ 製品の不具合の確認
- 製品の不具合などにより、回収修理の対象となっていない製品であること。

④ 備品の確認
- 取扱説明書が付属していること。
- 取扱説明書に記載されている全ての備品がそろっていること。特に取り付け時に必要な「固定金具(ロッキング・クリップ)」を確認すること。
- 注意書きラベルが本体に貼付され、内容が判読できること。

⑤ 外観の確認
- 本体や備品にひび割れなどの損傷または欠損がないこと。
- 本体の締結部にがたつきや緩みがないこと。
- 金属部品に変形がないこと。

⑥ 作動の確認
- リクライニング機構などの可動部が正常に作動すること。
- ハーネスの巻き取り装置が正常に作動すること。
- バックルが確実にロックし、解離ボタンを押すと解離すること。

⑦ 感触の確認
- 本体カバーやバックル部など子どもに触れる部分がなめらかであること。

⑧ 衛生の確認
- 汚れが無く、清潔に保たれていること。

⑨ メンテナンス性の確認
- メーカー及びその連絡先が明記され、製造メーカーが現存していること。

―「チャイルドシートの耐久性等に係る調査報告書」(財)日本自動車研究所より―